

日本で初めての女子留学生

教育問題プロジェクトチーム

榎本 眞己 陸自71

1 はじめに

教育問題プロジェクトチームは「先人の足跡」と題し、現代の青少年に読み聞かせるに相応しい旧軍人の生き様を委員が逐次交代で執筆しています。そのような中で、読者から「子供を育てる上で接触機会の多い女性についても記事にしては」とのご意見を賜りました。旧軍兵士に女性はいません。しかし明治の初めに長期にわたり米

国に留学した少女たちがありました。それは後に大山巖陸軍大将の奥様となった山川捨松や5千円札新紙幣の肖像に使われる津田梅子等です。

彼女たちは無事留学を終え、帰国後には、西欧文明を知る女性の先駆者として自分たちが学んだものを日本女性に分かつことが国費留学生としての使命と考え、それぞれの分野で活躍しました。

これらの事実を知ることが、皆様にも大変勉強になります。特に現在自分で閉じこもりがちとなっている人や学校に行っても友達ができないという人には勇気がもらえます。

2 女子留学生派遣の概要

江戸末期に海外諸国との間で結んだ条約は、治外法権を認め、しかも関税自主権が無く不平等条約でした。このため新政府は、明治4（1871）年に条約締結各国を正式に訪問し、条約改正の予備交渉を行なうこと、欧米先進諸国の制度等の現地視察と調査を目的にアメリカ合衆国からヨーロッパ諸国を巡って世界を一周する岩倉具視を団長とする大使節団を派遣します。

この大使節団の乗った日米両国国旗の翻る郵便船アメリカ号を利用して、5人の少女の留学生と一緒に旅立ちました。なお本船には男子53人の留学生も一緒でした。

少女を留学させる事は、当時、北海道開拓使であった黒田清隆の発案でした。それは黒田がアメリカとヨーロッパ諸国を視察した際に女性が男性と対等に議論し、生き生きとしているのを目の当たりにしたからです。

そこで日本の近代化のためには子供達を育てる母親の教育が不可欠と考えたのです。しかもその留学期間は10年という極めて長い期間です。

- このため成人になっていない次のような少女が選ばれました。
- 東京府士族 津田仙娘 梅子 満6歳
- 静岡県士族 永井久太郎養女 繁子

満10歳

○青森県士族 山川与七郎妹 捨松 満11歳

○東京府士族 吉益正雄娘 亮子 満14歳

○東京府士族 上田勝娘 悌子 満16歳



左から永井繁子、上田悌子、吉益亮子、津田梅子、山川捨松（渡米直後）

出典：ウィキペディア

考えてみますと、15歳前後の少女はともかく10歳前後や未満の少女にとつて海外に留学するということを理解することができたでしょうか。

きっと両親が説明したのでしょすが、アメリカという国がどこにあるのか？ 10年という期間がどのくらいなのか？ 少女に正しく理解できたとは

到底思えません。

しかしその真剣な説明の態度に、きつとただならぬことと理解したのではないのでしょうか。

世間からは「あのようないけない娘を、アメリカ三界までやる親の心は鬼だ」と、ささやかれながら両親は絵本や人形を持たせて送り出したので

す。この少女の留学先に関わるアメリカでの担当は在アメリカ少弁務使官（現在の公使）の森有礼（当時24歳）でした。そこで森は日本弁務使館の書記官であったチャールズ・ランマンに5人を預けました。1週間後に最年少の津田梅子と大陸鉄道横断の途中で雪のために眼を傷めた吉益亮子の2人はランマン宅に残り、他の3人は近くの別の家に移ります。2カ月後に森有礼はワシントン市内で英語の家庭教師をつけて5人の共同生活を始めさせます。しかし共同生活では日常会話が日本語のため英会話が上達しませんでした。そうこうしている内に、吉益亮子は患っていた眼の病が癒えず、このことが原因となりホームシックにかかります。また思春期を過ぎていた一番年長の上田悌子もホームシックにかかりますが、そこでアメリカに来て1年足らずですが、10月末に2人は帰国いたしました。

3 山川捨松

このことをきつかけに森有礼は残つた3人をアメリカ人の別々の家庭に託すことにします。まず山川捨松はアメリカ北東部のニューイングランド地方コネチカット州の牧師レオナード・ベーコン宅に、永井繁子はその近くでベーコン牧師と懇意のジョン・アボット牧師宅に預けます。最年少の津田梅子はチャールズ・ランマン氏の希望もあり同宅に再びお世話になります。

そして地元を卒業後、永井繁子と山川捨松はアメリカ最初の女子大学で、現在でも名門の誉れ高いパッサー・カレッジの音楽専攻科(3年)と普通科(4年)に入学し、寄宿舎生活をします。10年の留学生生活を終え、永井は無事卒業し帰国します。しかし津田梅子と山川捨松の2人は卒業までに未だ1年残っていたので、留学延長を願い出ます。そしてこれが認められ、翌明治15年に無事卒業し帰国します。

帰国した彼女達は、日本の女性に習得した技術を伝えたり、日本において最初のボランティア活動を行ったり、あるいは女子教育の草分けとして貢献します。

それではこの3人の留学経緯、留学問の様子と帰国後どのように過ごしたかを見てみましょう。

山川捨松は、会津藩の家老、山川重固の末娘として安政7年2月に生まれ、「咲子」と名付けられました。

咲子の父親は咲子が生まれる18日前に亡くなり、長男の大蔵(後に浩)がわずかに15歳で家督を継ぎます。

大蔵は慶応2年、幕府がロシアとの領土問題を交渉するため派遣した遣露使節の一員となります。それは会津藩が青年の視野を広げるために将来有望な青年を使節団員として随従することを幕府に願ひ出たことによりま

なつたとはいえ、元家老の家として重きを置かれていました。しかし慶応4年に会津藩は朝敵となり、官軍の薩長連合軍と戦います。このため山川家は咲子をはじめ全員が戦いに参加しますが、会津藩は幕府軍に敗けます。

このため32万石の会津藩は、下北半島最北端の不毛の地の3万石の斗南藩に移封され、以降、藩士達は極貧の生活のため飢えと寒さで命を落とす者が続出します。

山川家も一家で移りますが、このような状況ですので、咲子は函館の沢辺琢磨のもとに里子に出されます。明治4年陸藩置県が行われ、斗南藩は消滅し青森県となつてしまいます。大蔵は青森県に出仕しますが、1カ

月後に依頼退職し、東京に一族全員で引越します。このような折に黒田清隆が企画している留学生の募集を知り、咲子を応募させます。母は、この時に「娘は捨てたつもりで留学させる。しかし学問を修め無事に帰り来る日を心待ちに待つ(捨てて待つ)」という気持ちを含めて、「咲子」を「捨松」に改名させます。

捨松の次兄・山川健次郎(後の東大総長)は明治4年1月(捨松の派遣の10カ月前)、16歳の時に開拓使派遣の海外留学生の1人に選ばれ、コネチカット州ニューヘブンのエール大学付属シエフィールド科学校に留学します。

これにより少女を個別のアメリカ人のお宅に預けることになった時(明治5年10月末)、捨松は兄が住む街であるニューヘブンのレオナード・ベーコン宅に預けられることとなつたのです。そしてここで4年近くを実の娘同様に過ごし英語を習得します。ベーコン夫妻の末娘アリスは捨松より2歳上でしたが、2人は直ぐに仲良しになります。

捨松は地元のヒルハウス高校を卒業後、永井繁子とともにニューヨーク州にある全寮制の名門パッサー・カレッジ普通科(4年制)に進学します。彼女はすぐに学内の人気者となり、

2年生の時には学年会長に選ばれます。また成績の良いものだけに入会が許される「シエークスピア・クラブ」に入り活動します。さらに彼女の書くエッセイは優れていたことから学内の英文学賞を受賞します。

10年が過ぎた時、卒業まで未だ1年残っていたことから1年間の留学延長を申請します。そしてこれが認められ明治15年に同期生38名とともに「学上」の資格を得て3番目の成績で卒業します。

卒業後、帰国するまでの2カ月間を利用してニューヘブン病院付属のコネチカット看護婦養成学校に特別入学し、看護の知識や技術を修得し、甲種看護婦の資格を得ます。

明治15年11月、22歳で帰国した際、捨て待つと名付けた母はずでに65歳となつており、感動の再会を果たします。

帰国直後の捨松は、「梅子とともにアリスも日本に来て教師となり、女学校を開設することが将来の希望」とアリスに宛てた手紙に書いています。

帰国1カ月後の12月に、既に帰国していた永井繁子の結婚式が行われ、有志が余興としてシエークスピアの英語劇を演じます。これを見ていた当時陸軍卿であった大山巖が捨松を見染め

求婚します。

大山巖は既に結婚し4女をもうけていましたが、妻は産後の肥立ちが悪く出産後亡くなってしまいました。その4カ月後に捨松等が演じる英語劇を見て、見染めたのです。

当時日本の女性は10代後半に嫁ぐのが一般的でした。捨松は帰国した3カ月後には23歳です。捨松は留学で得たことを日本女性に伝えるべきという道義的責務を果たさずに結婚するということが良いのか否か悩みます。

しかし帰国しても日本語がやや不確かであり、しかも男子留學生の帰国者は早々と政府や教育関係などに仕事を獲得も、自分たちが役目を果たすための仕事は誰からも提供されません。このため何のために留学したのかと悶々とするようになります。

希少なアメリカ帰りの留學生とはいえ、専門分野の知識・技能の習得が無く、しかも日本語も覚束ない彼女たちに文部省側でも困ったのではと思われ

ます。
そして悩み抜いた挙句、帰国後半年が経った頃に結婚することを決意します。その悩みを親友アリスへの手紙に次のように書いています。「現在のところ、私が就職できるような仕事は全くなりません。(中略) 今一番やらなければいけないのは、社会の現状を

えることなのです。日本ではそれは、結婚した女性だけができることなのです。でもアリス、私はお国のために結婚するわけではありません。私はこの結婚を日本のためばかりでなく、自分自身のために真剣に考えています。お国のために役立つといつて、自分自身がみじめになるのは嫌ですが、自分も幸せになれば、そのうえお国のために役立つ道もあるはずです」



出典：ウィキペディア

結婚後捨松は社交界で活躍します。

当時、早期の条約改正を国是としていた明治政府は、官立社交場として設立した鹿鳴館において連日のように諸外国の外交官と夜会や舞踏会を開催していました。しかし同伴されて来る政府高官の婦人は、社交ダンスなどは知りません。しかし捨松だけは水を得た魚のように生き生きとし、英・仏・独

語を駆使して、時には冗談を織り交ぜながら諸外国の外交官たちと談笑したりします。その「鹿鳴館の華」と呼ばれるようになります。

またこのような折に共立東京病院を見学しますが、病人の世話をしているのが男性ばかりであったことに驚きます。そこで病院長に看護婦養成学校が必要なることを提言しますが、経費が無

いことから断られます。
そこで明治17年6月に3日間をわたって日本初のチャリティーバザー「鹿鳴館慈善会」を開催します。そしてこのバザーで得た資金をもとに、2年後に日本初の看護婦学校が設立されます。また伊藤博文の依頼により華族女学校(後の学習院女子中・高等科)の設立準備委員となり、津田梅子やアリス・ペーコンらを教師として招聘するなど、その整備に貢献します。

日清・日露の両戦争では、夫の銃後を守り、寄付金集めや、看護婦の資格を生かして日本赤十字社で戦傷者の看護を行います。そして政府高官夫人を動員して包帯作りを行うなどのボランティア活動も行います。さらに積極的にアメリカの新聞に投稿を行い、日本の置かれた立場や苦しい財政事情などを訴えます。捨松のこうした投稿がアメリカ世論を親日的に導くことになった一因ともなります。

このように「鹿鳴館の華」と謳われ、近代日本のチャリティーバザーやボランティア活動の草分け的存在として日本女性の進むべき道を示したのです。

その後、明治33年に津田梅子が女子英学塾(後の津田塾大学)を設立することになると、捨松は繁子とともにこれを全面的にボランティアで支援します。これは帰国後に一緒に女学校を設立しようと誓い合いながら、2人は自分たちが結婚したことを申し訳なく思っていたからです。

捨松は大山との間に2男1女の子供を産みました。これに大山の3人の連れ子を合せた大家族となりましたが、2人の立派な男子にも恵まれ幸せな家庭生活を送ります。

大山巖は糖尿の既往症がありました。晩年にこれに胃病が重なり、内大臣在任のまま大正5年に満75歳で死去します。巖の国葬後、捨松は公の場にはほとんど姿を見せず、亡夫の冥福を祈りつつ静かな余生を過ごします。

しかし大正8年に津田梅子が病に倒れて女子英学塾が混乱するや、自ら先頭に立ってその運営を取り仕切ります。そして津田の後任を指名し、新塾長の就任を見届けた翌日の同年2月18日に当時流行っていたスペイン風邪にかかり死去します。享年は58歳でした。

4 永井繁子

函館奉行の江戸詰であった父益田鷹之助の長男徳之進（のちに孝）は若い頃から英語を学び、文久元（1860）年14歳で幕府の支配通弁御用出役（通訳）として採用されます。この時に妹の繁子が誕生しました。文久3年に幕府はフランス陸軍士官を攘夷派の武士が斬殺したことへの謝罪賠償をするため遣仏使節を派遣することとなり、鷹之助と徳之進親子は約半年間、使節団の一行として随行します。

益田家では姉2人が夭折しており、女の子が育ちにくいと考えられたことから、繁子は沼津在住の幕府軍医であった永井家に養女として出されま

す。徳川幕府崩壊後、兄の孝は横浜でお茶と海産物の問屋（後の三井物産）をはじめます。そのような折に孝が女子留学生派遣の話聞いてきます。

このような父や兄ですから、是非繁子を留学させたいと考え、永井家と相談します。そして永井家の了解を得るや孝の弟の克徳が沼津に繁子を迎えるにいきます。すると10歳の繁子は10年間の留学を怖がりもせず、喜んでやつてきました。

他の留学生と一緒にアメリカに到着後、ペーコン牧師宅に山川捨松と一緒に居ますが、その後同じ町のアボット

牧師宅に預けられます。

このアボット宅で繁子は瓜生外吉という日本人男性に出会います。彼は福井大乗寺藩士の次男として生まれ、築地にあった海軍兵学校に入学します。そして卒業直前の明治8年に海軍省から米国のアナポリス海軍兵学校への入学を命ぜられます。そしてアボット家の近くのビットマン家に寄留して受験準備をしていました。

瓜生は明治10年にアナポリス海軍兵学校の入学試験に合格します。このため約48km離れたメリーランド州の全寮制のアナポリス海軍兵学校に入校します。しかし長期休暇時にはニューヘブンのビットマン家に戻り、繁子と会っていました。

明治11年9月、繁子は山川捨松と共にニューヨーク州のバツサー・カレッジに入学し、隣り合わせの寄宿舎生活を始めます。この際、捨松は「普通科」を選びますが、繁子は「芸術学科」（3年制）の音楽選考を選択します。入学試験は英文法と数学、地理、アメリカ史の筆記試験とハイドンとモーツァルトのソナタ曲の実技が課せられました。が、いずれも無事に合格しました。学校では声楽、ピアノ演奏、和声などの音楽の課程と一般科目ではフランス語、フランス文学、数学や英作文なども受講します。

在学中の3年間にキャンパス内ではしばしばコンサート「音楽の夕べ」が催されました。繁子はこのコンサートで何度もピアノ演奏や歌唱を発表します。

音楽の担当の先生は「彼女は演奏の上達がとて速い」と州教育局に報告しています。

明治14年6月に3年間の修学を終え卒業します。そして10月に一足早く帰国します。

アメリカの大学で正規の音楽教育を履修し、西洋音楽の理論と実技を修得した繁子は、帰国4カ月後には文部省直轄の「音楽取調掛」（後の東京芸術大学音楽部）の「洋琴奏師」に高額の俸給で採用されます。

繁子も10年の留学により日本語がやや不確かでしたが、ピアノ演奏の実技指導のため余り問題とはなりません。明治15年の12月1日、22歳の繁子は、帰国した捨松と梅子の列席を得て、海軍中尉瓜生外吉と結婚式を挙げます。その後、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）でも音楽と英語の教鞭を取ります。

繁子は妻として、また2人の間にもうけた4男3女を育てながら、学校で音楽指導を続ける当時としては珍しいキャリア・ウーマンでした。そして日

本で一番早く正式にピアノを習い、それを学校で教えた女流音楽家として21年間の人生を送ります。



出典：ウィキペディア

この間、多くの弟子を育てましたが、殊にピアノリスト幸田延（幸田露伴の妹）を育て、幸田延は滝廉太郎、山田耕筰を教えたことを考えると、日本における西洋音楽の濫觴をなしたと言えるのではないのでしょうか。

教師の職を辞した晩年は津田梅子の女子英学塾の社員として梅子を手助けします。また夫瓜生外吉は大正元年に海軍大將に昇進し、翌年に海軍を退役し予備役となります。

これにより夫婦は小田原の別邸で過ごしますが、大正10年の冬に夫外吉が難病の膠原病にかかります。繁子は夫の看病に尽くしますが、自らも直腸がんに侵され、夫に先立ち昭和3年享年

67歳で亡くなりました。

5 津田梅子

彼女の父仙は若い時に生きた英語を学ぶため横浜で福地源一郎（明治の政治評論家）が開いていた英語塾に入門し英語を教わります。万延元（1860）年、23歳の時に江戸にもどり、幕府の外国奉行通弁（通訳）となります。

その翌年に津田家の養子となり、次女初子と結婚します。そして明治維新の4年前の元治元（1864）年12月に次女の梅子が江戸牛込で誕生します。

慶応3（1867）年1月、幕府は発注していた軍艦の引き渡し督促のため使節団をアメリカに派遣しますが、この時に仙も通弁として6カ月間の派遣に随行します。

江戸幕府崩壊後、明治政府の北海道開拓使の嘱託となった仙は、黒田清隆の発案である女子海外留学生募集の話聞き、梅子を応募させます。

梅子は当時6歳と応募者の中で最年少でしたが、希望者が少なかったために留学生として採用されます。

留学生の一員としてアメリカに到着した梅子等は首都ワシントン近郊のジョージタウンのランマン夫妻のもとに預けられます。ランマン夫妻も最年少の梅子を我が子のように慈しみ育てます。

そして明治11年6月、私立小学校のカレッジエイト・インスティテュートを卒業します。

卒業後、ランマン宅から徒歩で一時間離れていた市内のアーチャー・インスティテュート女学校に入学し、鉄道馬車で通学します。

彼女は一般科目のほかにラテン語、フランス語などの語学や英文学のほか、数学、物理学、天文学、心理学、絵画・音楽等の多くの学科を学び、優れた成績を修め、アメリカの生活文化を吸収して成長します。また、ランマン夫妻に連れ添われて休暇には各地を旅行します。

彼女の卒業時の学業成績証明書には「ミス・ツダはラテン語、数学、物理学、天文学、フランス語に極めて優れた成績を修めた。彼女は学んだ学科のすべてに明快な洞察力を示した」と書かれています。

そして留学11年後の明治15年11月に、17歳で帰国します。

アメリカで少女時代を送った梅子にとつて、帰国後の日本はカルチャーショックの連続でした。まず日本語が理解できないだけでなく、日本女性の置かれている状況に驚きます。

そこで女性の地位を高めなければという思いを募らせ、自分が得たものを日本女性に分かつことが国費留学生と

しての自分の道義的責任だと考えます。

しかし政府からは帰国後の仕事について何の提示もなかったことは山川捨松と同じでした。そのような折に岩倉使節団の一員として一緒にアメリカに行った伊藤博文の斡旋で明治16年12月伊藤家に住み込みつつ桃夭女塾（実践女子大学の前身）という華族女学校で英語を教え始めます。そして22歳には同塾の教授になります。

この頃、自身の結婚についてはランマン夫人への手紙で「婚期を逸すると思われるも私はオールドミスを試してみる」と書いていますので、女性としての幸せより国費留学生としての使命を達成することに重きをおいた人生を選んだのではと思われれます。

やがて彼女は教育者として自分自身の学校をつくる夢を持ちます。そこで再度アメリカへ留学することを決意し、24〜27歳の時にアメリカのプリンマー大学へ留学します。

在学中（明治22年〜明治25年）に質の高い少人数教育を受けた経験が、その後の梅子の教育観の一つになります。

また在学中の明治24年に自分のあとに続く日本女性のための奨学金制度「日本婦人米國奨学金」委員会を設立します。この制度を利用して計25人の日本女性がアメリカに留学します。

そして帰国した多くの者が女子教育の指導者となりました。

留学中、大学からはアメリカへ留まり学究を続けることを薦められますが、明治25年8月に帰国し、再び華族女学校に勤めます。



出典：津田塾大学HP

明治33年7月、梅子は父の仙や大山捨松、瓜生繁子らの協力者の助けを得て、「女子英学塾」（現在の津田塾大）の設立願を東京府知事に提出します。そして認可を受けると東京麹町区に同校を開校し塾長となり、華族平民の別のない女子教育を始めます。

この際、捨松の留学時のホストシスターであったアリス・ベーコンが開校式に先駆けて来日し、梅子とともに入学試験やクラス分けなどを担当します。

梅子の考えは「英語をとおして世界に目を向けられる人間を育てる」ことにより「英語の技術修得のみならず、

視野の広い女性を育成する」ことでした。これが建学の精神となり、豊かな教養と高い専門性を備えることが今でも津田塾大の伝統となっています。

梅子は塾の創業期に健康を損ない、塾経営の基礎が整うと、大正8年1月に塾長を辞任します。そして鎌倉の別荘で長期の闘病生活を余儀なくされ、昭和4年8月16日に脳出血を併発し死去します。享年64でした。

このように梅子は日本の女子高等教育の先駆者となり、女子英学塾（のちの津田塾大学）を創設しました。

6 おわりに

3人の留学の経緯と留学生活並びに留学後の人生の概要をお話ししましたので少々長くなりましたが、いかがでしたでしょうか。皆さんそれぞれに感ずるところがあったと思います。私は次の3点を皆様にお話しして、この稿を終えようと思います。

まず1つは、当時の人々が「進取の気性」（従来の慣習にこだわらず、進んで新しいことをしようとする）に富んでいたことです。

この女子留學生の派遣は明治維新からわずか3年後のことであり、鎖国を終え、日本が開国（1854年）してからわずか17年後のことです。しかも最後まで留学を全うした少女の親兄弟

の誰かは既に海外の経験がありました。きつと派遣された少女の親等は海外を見て、これら諸外国に日本が負けないようになるためには、これらの国の知識や技術を導入することが必要なることを痛感していたのでしよう。

しかも派遣された少女の親は全員が旧幕臣か佐幕派です。ということは、薩長中心の政府に自分たちも何とか伍していくためには女性でも海外に留学することが必要と考えたのでしよう。

だからこそ「進取の気性」をもつて15歳以下の少女を10年間もの長期にわたり留学させたのです。

2つ目は3人の少女が当初言葉も話せないにも拘わらず孤独に打ち勝ち留学生活を全うし、しかも優秀な成績で卒業したことです。

明治政府が成立して3年後のことです。海外の事情も十分にわからないうちにある、幼い時に戦に参加したり、養女に出された少女が悲壮な決意の下にアメリカに留学したのです。しかも当初は言葉も通じない中で、まずはホームステイ先に親しみ、次いで学友を作りつつ学業を修めたのです。

そして一生懸命やっていたら、そのうち学年会長に指名されるようになったのです。

自宅に閉じこもっている人が最近話題になっていきます。しかし言葉の通じ

る皆さんだったら何も閉じこもる必要はないじゃないですか。あるいは学校に行っても友達ができないという人も居ると思います。しかし言葉は通じるとはいいですか。しかも悩みを聞いてくれ、相談にのつてくれる両親がすぐ傍に居るではないですか。留学した幼い彼女達の苦勞に比べると大したことには無いですよ。

そんなことに悩むより、自分が今出来る事、例えば一生懸命に本を読んだり、尊敬する人の話を聞いたり、相手のことを親身になって考えるようにして自分自身を磨くようにすれば、その内きつと向こうから友達になって欲しいとお願ひされるはずですよ。

論語に「子曰く、徳孤ならず、必ず鄰有り」という言葉があります。意味は次の通りですので、参考にしてください。

「孔子が『徳を持つている人は孤立することはありません。必ずその人の周りに隣人も云うべき人が集まってくるものです』とおっしゃいました」

3つ目は帰国後の三人三様の生き様です。

方にすることに貢献しました。瓜生繁子は留學中に知り合った日本人と結婚し、音楽教員として仕事と家庭を両立し、日本における初めての西洋音楽教育家として多くの後進を育てました。

そして津田梅子は独身を貫き、女性の地位向上こそ日本の発展につながると思ひ、男性と対等に力を発揮できる女性の育成を目指し、女性の高等教育に生涯を捧げました。

しかも3人（捨松の親友アリスを含む）は、津田梅子の創立した女学校を軌道に乗せるのに全員で協力したのです。

各人それぞれの人生は異なりますが、いずれもが日本初の女子国費留學生として次代の日本女性に自分たちが学んだことを伝えることが自分の使命だと考え、留学で得た経験や技術や知識を日本に普及するに務めました。これで終わります。

【参考文献】

- ・『論語解義』 簡野道明 明治書院
 - ・『明治の女子留學生』 寺沢龍 平凡社新書
 - ・『鹿鳴館の貴婦人 大山捨松』 久野明子 公文庫
 - ・『津田梅子』 大庭みな子 朝日新聞
 - ・『津田梅子について』 津田塾大ホームページ
- （写真は津田塾大デジタル・アーカイブ）